

絆

kizuna

ひと・まち・みらい

木津川市を創るすべての絆「第五十一回」

土偶に恋して

警田 亜紀子さん

「土偶女子」その言葉のインパクトに驚いた。今回取材させていただいた警田さんの肩書だ。どんな方かと構えていたが、気さくでフレンドリーな振る舞いに、緊張が解れた。

フリーライターとして活躍する警田さん。奈良の本を執筆するためのネタを探しに訪れた観音寺本馬遺跡で、ある土偶に一目惚れし、自分の中の「土偶女子」が開花したという。

その時の写真を見せてくれた。「土偶というと、遮光器土偶をイメージしがちですが、こんな子がいるんだ！」と驚きました。つぶらな目とぽかーんと開いた口が可愛い！と思つて」と鼻息を荒くする。



「面白い土偶の世界を、より多くの方に知ってもらいたい！」と、土偶本を出すため、すぐに出版社に掛け合った。しかし、出版業界の波は厳しく、実際に発行に繋がったのは、それから5年後のことだ。



「その間は、専門家や他のライターさんが書かれた本を読んで、多方面から土偶を勉強しました。直接遺跡へ赴いたり、博物館へ行ったりもしました。縄文時代のことも勉強して、知識を増やしましたね」と話す。5年は長かったに違いない。しかし、苦労を微塵も感じさせず、むしろ楽しそうに意気揚々と話す姿に、土偶への愛を感じた。

「文章を勉強するために大学の通信教育を受けていたのですが、授業に『考古学』というものを見てつけて、直接、先生のもとへ、本を出したいので勉強させてください」とお願いしに行きました「このアクティブな行動が、後の自著の出版に繋がるきっかけとなった。

どんな時も前進し続ける警田さんに、これから

の夢を聞いた。「関西では、土偶より埴輪のほうが認知度が高いですが、木津川市にもたくさん歴史的文化財や環境があるので、子どもたちにも興味を持ってもらいたいです。難しく考えず、「面白い！」「楽しい！」と感じたシンプルな気持ちを大切にしていきたいと思います」と語る。

「あとは、自分が素敵だなと感じた土偶を実際に集めて、警田的土偶展を開きたいですね！」と目を輝かせる。「縄文時代には文字がないので、どんな生活をしていたのか、土偶も何のために誰が作ったのか、明確には分からないんです。その分、想像できる楽しさがあります。専門家だけじゃなくて、誰でも楽しく想像できる。まずは、その興味の入りを、自分が作りたいと思います」

たしかに、持参してくださった著書をめくると、どの土偶にもキャッチーなタイトルが見受けられ、専門的な話はほとんどない。「ここが可愛い！」「ここが面白い！」と、一般の人が見て楽しめる内容である。わたしも、次はどんな土偶に出会えるのだろうか？と楽しくて、ページをめくる手をとめられなかった。

きっと、警田の大土偶展が開催される際には、訪れた多くの人が、土偶の魅力に取りつかれることだろう。



※写真の土偶は顔面把手(神奈川県立歴史博物館所蔵)